

「情動への評価」研究の展望：概念，情動過程での位置づけ，その形成について

奥村，弥生
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18451>

出版情報：九州大学心理学研究. 11, pp.109-118, 2010-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

「情動への評価」研究の展望

— 概念, 情動過程での位置づけ, その形成について —

奥村 弥生 九州大学大学院人間環境学府

Review on evaluation of emotion: Concepts, positions in the emotional process, and formation

Yayoi Okumura (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

People sometimes evaluate their emotions; for instance, they feel ashamed for having been angry or, to give another example, they feel that their sadness is important and necessary. The present article reviews such evaluations of emotion. First, through the organization of related concepts, three viewpoints emerge that suggest clear explanations of the concept and the mechanisms of evaluating emotions: (1) the evaluation of emotion involves elements of 'doing', that is, elements that are distinct from simple awareness, attention, and so on, (2) it is necessary to discriminate between one's own emotions and other's emotions, (3) evaluations of emotion hold true for the entire range of positive and negative evaluations. Second, in the process of emotional experience, the evaluation of emotion has been presented as not only a one-time emotional process (Kennedy-Moore & Watson, 1999) but also as traits that affect the entire emotional process. Third, the formation of evaluation of emotion was discussed. The response of parents to children's emotions (e.g., anger) caused another (secondary) emotion (e.g., shame) in children, and the repetition of this pattern in the course of the developmental process was instrumental in triggering the shift from the experience of secondary emotions to the evaluation of emotions.

Key Words: evaluation of emotion, meta-emotion, meta-mood, secondary emotions, emotional intelligence

I. 情動研究の流れと「情動への評価」研究の位置づけ

1. 情動の適応機能

近年, 情動は人の適応に重要な役割を担うものと位置づけられるようになり (Ciarrochi, Forgas, & Mayer, 2001 中里他訳 2005; 遠藤, 1996), その機能についての研究が盛んに行われている。情動は, 主観的に感じられる内的情感の側面 (Experience), 身体的な反応である神経生理学側面 (Arousal), 表にあらわれる表出行動的な側面 (Expression) という3つの要素から構成される (遠藤, 1996; Izard, 1991 荘厳監訳 1996; Kennedy-Moore & Watson, 1999)。そして, それは事象への単なる '反応' にとどまらず, 個人が環境に適応するのを助ける '機能' 的な側面を持つ。例えば, 情動は直面する状況への対処を動機づけ, その状況に対処するのに最適な身体状態を準備し, 他者へ自分の置かれている状況や状態を知らせて必要な反応を引き出すといった機能があり (遠藤, 1996), これらはそれぞれ上記の情動の3要素と対応させて位置づけることもできる。また, それらを集約して, 情動の機能をシグナルの発信の一点に集約できるとする研究者 (Campos, J.J., Campos, R.G., & Barrett, 1989) や, 情動の意思決定の機能 (Damasio, 1994) に焦点を当てる研究者もいる。

例えば, 悲しみは重要な対象を喪失した際に経験される情動であり, そのような状況を自分や他者に伝達するシグナルとして働くことで, 自己に対しては活動を抑止しそれ以上の消耗を防ぐ役割を, 他者に対しては擁護や共感を引き出すという役割を持っているという (Malatesta & Wilson, 1988)。このように, 各種情動がそれぞれ固有の適応機能を持つ。

しかし, 情動は必ずしも適応的に機能しない場合もある。例えば, 情動が経験されてもそれを認識したり言語化したりできないアレキシサイミア (Taylor, Bagby, & Parker, 1997 福西監訳 1998) の人々は, 摂食障害や心身症などの心理的不適応を持ちやすい (小牧・久保, 1997; Taylor et al., 1997)。また, 情動は社会的場面に応じて抑制することが必要な一方 (Ekman & Friesen, 1975 工藤訳 1987), 過度の抑制は心身の健康に悪影響を及ぼす (Gross & John, 2003; Pennebaker, 1997 余語監訳 2000) こともある。すなわち, 情動とは, 人間にとってよくも悪くも働く「両刃の剣」のようなものであるといえよう。

よって, 適応という観点から情動を捉えた場合, その適応機能を左右するものが注目され, 情動知能や情動コンピテンスなどの概念の枠組みの中で議論がなされてきた。そこでは, 情動を知覚, 表現, 理解, 管理する能力 (Ciarrochi et al., 2001) や, 自分の情動への気づきや,

他者の情動を識別し理解する能力、情動とその表出に関する語彙を使用する能力 (Saarni, 1999 佐藤監訳 2005) などの重要性がこれまで検討されている。このような情動の適応機能を左右する要素は、心身の健康や心理的適応と関係が深いという点で、実証的にも臨床的にも重要な研究領域と言えよう。

2. 情動への評価への着目

このように、情動にまつわる様々な要素が検討される中で、人が自己の情動をどのように主観的に捉え、評価しているのかという点についてはあまり検討されていない。人は、自己の情動に対して評価的な捉え方をすることがある。例えば、人前で怒りを顕わにしまい、それを恥ずかしいと感じたり、悲しみを経験して、それを自分の糧になる必要なものと感じたりする。また、そのような個別の情動経験に対する一回性の評価のみならず、常日頃から怒りは恥ずかしいものだとか、悲しみは人生において必要なものであるというような、個人が一貫して抱いている評価の傾向というものも存在するだろう。

情動が多くの場合短期間に生じる一過性の変化しやすいものであるのに対し、情動への評価は、ある程度固定化された持続的なものであり、個々の情動経験や表出、制御に背後から影響を及ぼしている可能性が考えられる。ここに、情動への評価に着目する意義がある。すなわち、一過性の個人の情動経験のみならず、情動経験の背後にある情動への評価を捉えることで、個人の情動経験のあり方について、特性的な観点からよりの確に捉えうる可能性がある。

では、このような「情動への評価」の現象は、これまでどのように議論されてきたのだろうか。情動研究を概観すると、このような情動への評価に相当する概念がいくつか見られる。例えば、メタ情動 (Gottman, Katz, & Hooven, 1997)、メタムード (Mayer & Gaschke, 1988; 鈴木・木野・速水・中谷, 1999)、感情¹⁾への恐れ (Williams, Chambless, & Ahrens, 1997)、感情受容 (古宮, 2000)、個別情動に対する意識的態度 (坂上・菅沼, 2001)、不快情動回避心性 (福森・小川, 2005)、情動への評価 (奥村, 2008) などが挙げられる。また、関連する周辺概念として、一つの情動が異なる情動を生じさせ

ることを示した情動同士の相互作用に関する指摘 (Izard, 1991) や、派生的感情 (工藤・マツモト, 1996) の概念も注目される。これらはいくつかの共通点があるが、個々の概念同士の位置づけが整理されないまま研究が進められてきている。よって、概念の整理を行い、これまでの知見を統合することが必要と考えられる。

そこで本論文では、まず、これらの類似概念について概観し、共通点と相違点を明確にして概念整理を行う (Table1)。次に、情動への評価がどのように情動経験過程の中に位置づけられるのか、どのように情動の適応的機能に関与するのかを論じる。さらに、情動への評価の形成について、発達過程における養育者との関係性との関連に着目して論じる。

II. 情動への評価の関連概念の整理

1. メタ情動 (Meta-Emotion)

メタ情動 (Meta-Emotion) は、家族の情動コミュニケーションについて関心を持っていた Gottman et al (1997) が、家族研究の過程で提唱した概念である。彼らは、メタ情動について、情動についての情動や認知である (Emotion and Cognition about emotion) と定義し、情動についての内的情感や概念や哲学といったものを含むとした。

彼らは、メタ情動の概念を、親による子どもの養育や家族関係について説明する概念として用いている。具体的には、メタ情動として、親の自分の情動への覚知 (Awareness)、子供の情動への覚知、子供に情動について教育すること (コーチング/Coaching) という3側面を面接調査によって測定し、親の覚知とコーチングの高さは、夫婦関係や子供の情動制御能力、その後の子供の社会的適応などと関連することを報告している。

メタ情動の概念は、個人が情動に対して抱く評価を取り上げた点において注目に値する。しかし、実際に測定されているのは、情動の覚知や子どもへのコーチングであり、本来概念に含まれていたと思われる情動への評価に相当する要素が十分捉えられていない。また、家族関係や子どもへの影響を説明する概念として用いられているが、その人自身の情動の働きにおいてどのような役割を果たすのかについても検討が望まれる。

なお、メタ情動について、Saarni (1999) は、自らが「情動の素朴理論」として捉えているのと同類のものと述べている。「情動の素朴理論」とは、「私たちが情動とはいったいどんなものか、どのように作用するのかについての文化、あるいは下位文化の見方 (文化的信念)」とされる。メタ情動が家族レベルの「文化」なのに対し、情動素朴理論は国・民族レベルの「文化」を想定しているように思われる。これは、情動の捉え方が、文化など

¹⁾ 本論文では、引用文献において「感情」という用語が用いられている場合には「感情」、それ以外は「情動」という用語を用いているが、両者を意味的に区別するものではなく、相互に入れ替え可能な言葉として用いる。これは、「情動」あるいは「感情」という用語の用い方は研究者間によって一致しておらず (今田, 1999)、一貫した区別がないことによる。いずれも emotion の訳語として用いている場合が多いが、区別する場合は、emotion を情動、affect を感情とすることが多い (遠藤, 1996; 河合, 2007)。また、気分 (mood) は、情動の中でも比較的弱く、持続的で、対象が不明瞭なものを指す (河合, 2007)。

Table 1
情動への評価の類似概念、周辺概念の整理

概念	研究者	定義 (内容)	対象	測定されている内容
メタ情動 (Meta-Emotion)	Gottman, Katz, & Hooven (1997)	情動への情動や認知	自己情動、子の情動 (悲しみ、怒り)	親の自己情動の覚知、 親の子の情動の覚知、 子への情動コーチング
メタムード (Meta-Mood)	Mayer & Gaschke (1988)	気分をモニター、評価、 調整する気分制御過程 の所産	自己情動 (気分全般)	注意、明晰性、修復
	鈴木・木野・ 速水・中谷 (1999)	同上 (日本語版作成)	自己情動、他者情動 (不快情動)	調整、関心、不快感
感情への恐れ (Fear of Emotions)	Williams, Chambless, & Ahrens (1997)	自己の感情をコントロール できなくなるのではない かという恐れ	自己情動 (怒り、ポジティブ感情、 抑うつ、不安)	自己感情をコントロール 不能になることへの 恐れ
感情受容 (Affective Acceptance)	古宮 (2000)	感情経験への無条件の 受容的態度	自己情動 (感情全般)	感情の受容
個別情動に対する 意識的態度 (Conscious Attitudes toward Four Discrete Emotions)	坂上・菅沼 (2001)	意識レベルでの情動情 報処理 (情動制御の一 面)	自己情動、他者情動 (喜び、悲しみ、怒り、 恐れ)	内省傾向、自己情動の 覚知、他者情動の覚知、 情動に対する不快感
不快情動回避心性 (Tendency to Avoid Negative Emotions)	福森・小川 (2005)	不快な情動 (抑うつ・ 不安) を実感し、受け 止め向き合うことの困 難さ	自己情動 (抑うつ、不安)	不快情動の回避
情動への評価 (Evaluation of Emotion)	奥村 (2008)	自己が経験した情動に 対する肯定・否定の価 値づけを伴う評価	自己情動 (悲しみ、怒り)	他者懸念 必要性 負担感

の個人のおかれた環境に影響されることを示唆する点で、興味深いものと言える。

2. メタムード (Meta-Mood)

メタムード (Meta-Mood) は、情動知能 (Emotional Intelligence) の研究者である Mayer & Gaschke (1988) によって提唱された概念であり、「気分をモニターしたり、評価したり、時には調整したりといった気分制御過程の所産である」とされている。そして、その測定のためにメタムード経験尺度 (Meta-Mood Experience Scale) が作成され、さらに Salovey, Mayer, Goldman, Turvey, & Palfai (1995) によって、特性メタムード尺度 (Trait

Meta-Mood Scale) へと発展している。

実は、このメタムードの元々の概念には、本論文が焦点を当てる情動への主観的評価に関する要素は含まれていない。特性メタムード尺度の下位因子として抽出されているのは、「注意」「明晰性」「修復」の3要素であり、自らの気分にとどの程度注意を向けるか、明確に認識できるか、ネガティブな気分を修復できるかといった内容である。そして、この日本語版を作成する中で、情動への評価的要素について言及したのが、向山 (1998) や、鈴木ら (1999) の研究である。鈴木ら (1999) は、「情動への注意」とされる下位尺度に、情動への評価を測定する項目が含まれていると指摘し、情動への評価を測定し

うる下位尺度の作成を試みている。その結果、「不快感情を持つことに対する不快感」と命名される、評価に相当する因子が抽出されている。

鈴木ら (1999) の研究は、他の因子と区別されていない情動への評価の側面に着目した点で、評価される。しかしながら、作成された尺度の信頼性は α 係数が.64とやや低く、共感性との関連を通して行われた妥当性の検討は不十分なものに終わっている。また、概念としての明確な位置づけが為されていないこと、不快情動に限定されていること、さらに、評価として「不快感」しか抽出されずにとどまっていることなどが課題として挙げられる。

3. 感情への恐れ (Fear of Emotions)

Goldstein & Chambless (1978) は、パニック障害の特徴として「恐怖への恐怖」を指摘した。そして、この概念を拡張したのが、「感情への恐れ」であり、自己の感情をコントロールできなくなるのではないかという恐れを指す (Williams et al., 1997)。Williams, et al. (1997) は、怒り、ポジティブ感情、抑うつ、不安についての感情への恐れを測定する Affective Control Scale (ACS) を開発しており、ACS を用いて行われた研究 (Mennin, Heimberg, Turk, & Fresco, 2005) では、不安障害の者が、感情への恐れを強く持つことが見出されている。また、ACS 日本語版を作成した金築・増田・及川・根建 (2006) は、感情への恐れが、情動を明瞭に認識しにくい傾向 (向山, 1988) や不快情動を回避する心性 (福森・小川, 2005) と正の関連を持つことを報告している。さらに、金築・増田・及川 (2007) は、感情への恐れが、自らの感情への非機能的な対処 (反すう、心配、問題回避) やストレス反応の高さと正の関連を持つことを報告している。このようなことから、感情への恐れが、精神的健康や心理的適応と関連することが示唆されている。

感情への恐れは、不安障害という特定の疾患との関連が指摘されている点で注目に値する。ただ、「恐れ」のみを取り上げていることから、情動への評価の一部に焦点づけたものと位置づけられる。また、感情への恐れの内容は、感情そのものへの恐れではなく、感情をコントロールできなくなるのではないかという恐れであるという点で、本研究が対象とする情動への評価とは若干異なるものである。なお、これに関連して、情動制御の評価 (Evaluation of Emotion Regulation) という用語を用いて、情動の「制御」についての評価に焦点を当て、情動制御方略の個人差を検討しようとする研究も報告されている (Mauss, Evers, Wilhelm, & Gross, 2006)。

4. 感情受容 (Affective acceptance)

感情受容 (Affective acceptance) は、古宮 (2000) によって作成された感情受容尺度 Test of Affective acceptance によって測定される。古宮 (2000) は、感情に対する無条件の受容的な態度が、心理的健康には欠かせない要因の一つであると多くの主要な心理治療理論で考えられてきたことを指摘し、感情経験への無条件の受容的な態度を測定するために、米国で Test of Affective acceptance を作成した。そして、信頼性・妥当性を確認し、臨床群の方が非臨床群よりも感情受容度が低いことなどを報告している。

感情受容は、心理治療論を理論的背景にして作られた概念であるという点や、感情に対する肯定的な評価を取り上げている点が特徴である。ただし、「受容」という1次元の態度のみを取り上げていることから、情動への評価の一部に焦点づけたものと位置づけられる。

また、これは米国で実施された研究であり、尺度の日本語版は作成されていない。日本を含むアジア文化は、欧米文化に比べて感情のコントロールを高く評価し、アジア人は、一般的に感情に対するオープンな態度に価値を置かないといわれていることから、課題として、欧米文化とアジア文化の違いについて考慮する必要性を古宮 (2000) は指摘している。

5. 個別情動に対する意識的態度 (Conscious Attitudes toward Four Discrete Emotions)

個別情動に対する意識的態度は、坂上・菅沼 (2001) が作成した個別情動に対する意識的態度尺度によって測定される。これは、愛着と情動制御との関連を調べるにあたり、情動制御の一部として、意識レベルでの情動情報処理を測定することを目的に作られたものである。下位因子として、内省傾向、自己情動の覚知、他者情動の覚知、情動に対する不快感の4つが見出されており、このうち情動に対する不快感は、情動を感じることを「いやだとか恥ずかしいと思うことがある」など、情動に対する主観的評価を反映した因子と考えられる。ただし、不快感のみに焦点があてられていること、自己情動と他者情動が区別されずに測定されていること、情動情報処理の一要素としてのみの説明で、特に概念化されていないことなどが不十分な点として挙げられる。

6. 不快情動回避心性 (Tendency to Avoid Negative Emotions)

不快情動回避心性は、福森・小川 (2005) によって提唱されたものであり、「ある出来事によって喚起される不快な情動 (抑うつ・不安)、またそれに伴う苦痛を実感し、自らのものとして受け止め向き合うことの困難さ」とされている。これは、不快情動を回避・否認するといっ

た対処行動そのものではなく、その背景に存在する心性として位置づけられている。不快情動回避心性尺度（福森・小川，2005）は1因子性で、抑うつ・不安への回避態度や恐れ、耐えられなさなどが測定されており、アレキシサイミア傾向や自我同一性の低さとの関連が報告されている。この「回避」という態度には情動への評価的要素も含まれていると思われる。ただし、「回避」という一部分的な態度（評価）のみに、また、不快情動のみに焦点づけたものと位置づけられる。

7. 情動への評価 (Evaluation of Emotion)

奥村（2008）は、人が自己の情動に対して抱く主観的評価に着目し、「自己が経験した情動に対する肯定・否定の価値づけを伴う評価」と操作的に定義される「情動への評価」について質問紙調査を行った。そして、悲しみと怒りについての情動への評価尺度作成を通して、情動への評価の3側面（因子）「他者懸念」「必要性」「負担感」を見出している。

「他者懸念」は、自己の情動に対して情けなさや恥、罪悪感などを感じる内容からなっている。恥や罪悪感は自己意識的情動と呼ばれ、他者視点から見た自分を意識して初めて生じるという特徴があることから（Lewis, 1992 高橋監訳 1997）、「他者懸念」は他者を意識しての否定的評価とされている。「必要性」は、情動を感じるものの必要性や有用性を認める内容からなる情動への肯定的評価である。「負担感」は情動を感じることに對するきつさや厄介さなど自分の中で経験される負担感からなる否定的評価である。他者懸念と負担感はいずれも否定的評価だが、他者を意識する要素があるかないかという点で異なっている。

奥村（2008）によれば、情動への評価は、一回性のもののみならず、常日頃から個人が一貫して抱いている評価の傾向を含むものと想定されている。実際、7～8週間空けて測定された情動への評価の再検査信頼性は $r = .58 \sim .74$ であることが報告されており（奥村，2008）、情動への評価とは、ある程度固定化された特性的な性質をもつものと考えられる。

また、情動への否定的評価は、アレキシサイミアの下位要素である情動の認識困難・言語化困難と正の関連を持つことが報告されている。また、情動表出の統制との関連をみた奥村（2009）によれば、統制可能感（中田，2006）が高いと情動への否定的評価が低いことや、悲しみの場合は男性において抑制（櫻村・岩満，2007）と統制可能感の交互作用が認められ、抑制が高い場合に、統制可能感が低い方（出せない）が高い方（出さない）よりも否定的評価が高いことなどが報告されている。

以上の結果から、情動への評価は、主に情動制御に関連し、情動が適応的に機能するかどうかに関わるものと

考えられている。課題としては、悲しみと怒りの2情動のみの検討にとどまっている点が挙げられる。喜びへの評価の尺度作成は、項目に高割合で天井効果が認められたことにより断念されており、改めて検討する必要性が指摘されている。

8. 概念整理～情動への評価という観点を軸として～

以上、情動への評価の関連概念について概観した。各概念は、それぞれ異なる研究背景を持っており、共通する部分があるにも関わらず統合されていない。また、そのことにも起因して、情動に関する他の要素（例えば情動の覚知、認識など）と明確に区別されていない。自己情動と他者情動、情動一般に対する評価が混在していたり、評価の一部（恐れや受容）のみに焦点づけられているなどの問題点があった。そのために、包括的な概念定義が不十分なものとなっている。

よって、以上の問題点を踏まえ、概念を整理する観点として、(1) 情動への評価は、情動への覚知や認識などと区別され、価値づけを伴うものであること、(2) 自己の情動に対するものか、他者の情動や情動一般に対するものか区別する必要があること、(3) 肯定的評価から否定的評価まで幅のあるものと考えられることの3点があるのではないかと考えられる。そして、この3点を包括している点で、奥村（2008）による「自己が経験した情動に対する肯定・否定の価値づけを伴う評価」という定義は、有用性のあるものと考えられる。

また、これまでに挙げられた情動への評価に関わる概念は、共通して、情動の適応機能に関わり、心理的適応や精神的健康と関連することが示唆されている。よって、情動への評価が、情動経験や情動の適応機能にどのような関連を持つのかについて、次に議論する。

Ⅲ. 情動経験過程における「情動への評価」の位置づけ

1. 情動表出（制御）過程モデル

情動への評価は、情動経験の中にどのように位置づけられるのか、また、どのようにして情動の適応的機能に関連するのだろうか。この点を考えるにあたり、まず、情動の経験過程についての枠組みを得るために、Kennedy-Moore & Watson (1999)らのモデルを援用し、それと情動への評価との関連を議論したい（Fig.1）。彼らが提唱している情動表出についてのモデルによると、人が情動を経験してから表出に至るまでに5つの段階があるとされている。

第1段階は「前内省的反応段階 (Prereflective Reaction)」と呼ばれ、何らかの刺激によって身体反応が生じているが、それがまだ意識できてはいない状態にある

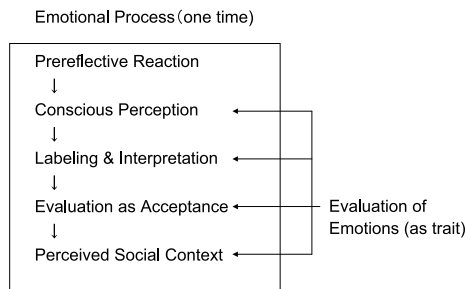


Fig.1 情動表出過程 (Kennedy-Moore & Watson, 1999) (一回性) と情動への評価 (特性) の関係

段階である。

第2段階は「反応の意識的知覚段階 (Conscious Perception of Response)」であり、第1段階で生じた身体反応が、当人に意識される段階である。第1段階と第2段階において情動が制御される場合、情動は当人の意識に上る前に押さえ込まれ、当該の情動はもちろん、それを制御していることすら意識されない。これは通常「抑圧 (repression)」と呼ばれる。

第3段階は「反応のラベルづけと解釈の段階 (Labeling and Interpretation of Response)」であり、意識的に自覚された身体反応に解釈が生じ、「悲しみ」「喜び」など具体的なラベルづけが行われる。この段階を経て、人は初めて自らの内部で生じる身体的な喚起を、具体的な情動として認識することができる。この段階での困難としてアレキシサイミアが挙げられる。アレキシサイミア患者は、身体的な喚起を自覚することはあっても、それを具体的な情動として捉えることは困難である (Taylor et al., 1997)。

第4段階は、「反応の受け入れ段階 (Evaluation of Response as Acceptable)」であり、具体的に認識された反応が、当人の信念や目標に照らして、当人にとって受け入れられるものかどうか評価される段階である。評価の基準は、何が重要か、典型的か、望ましいかという当人の信念による。そのような信念は、情動についての一般的な捉え方からくるものもあれば、個人に特有の信念の場合もある。概して、自己概念と整合しない情動は望ましくないものとして押さえ込まれるという。

第5段階は「社会的文脈の知覚の段階 (Perceived Social Context for Expression)」であり、情動表出に至る最終段階である。ここでは、現在の状況やその社会的文脈の参照を経て、情動表出がなされるかが決定される。情動の表出が社会的に問題を引き起こすような場面では、その表出は控えられる。

プロセス後半の第4段階や第5段階における情動の制御では、情動を認識しながらもそれを意識的に押さえつ

けようとする意図が経験される。このような意識的な経験を伴う情動制御は、一般に「抑制 (suppression)」とよばれ、無意識的な制御と区別される。

2. 情動表出過程と情動への評価との関係

以上が Kennedy-Moore & Watson (1999) による情動表出過程モデルであり、情動制御の説明にもよく用いられ (木村, 2006; 櫻村・岩満, 2007)、情動経験過程を示したものと考えられる。では、情動経験過程と情動への評価との関係はどのようなものだろうか。ここでは、2つの視点を提示したい。

まず、以上の5つの段階のうち、第4段階に着目したい。4段階目は、情動が自分にとって受け入れられるものかどうか評価される段階とされており、これは、個人の情動への評価に相当する段階と考えられる。よって、情動をラベリング後、社会的文脈を参照して情動が表出されるまでの間に、情動を評価する段階があると位置づけられる。そして、情動をどう評価するかによって、情動が当人に受け入れられなかったり、その後の表出が抑制されたりすると考えられる。

さらに、これに加えて、ここでは、情動への評価と情動の意識的知覚 (第2段階) やラベリング (第3段階) との関連についても指摘したい。Kennedy-Moore & Watson (1999) によるモデルが示しているのは、基本的に一回性の情動経験である。つまり、一度の情動経験がどのようなプロセスを経て表出・制御されるのかを示している。その場合、情動を評価するのは、意識化とラベリングの後の段階ということになる。しかし、個人が特性的に持っている固定化した情動への評価は、一つの情動経験の以前に存在すると考えられる。そして、一つの情動経験が生じた際に、その背後から情動経験全体に影響を及ぼすことも想定しうるだろう。例えば、情動への否定的評価を抱えていることによって、情動が喚起されてもそれを意識化できず抑圧したり、ラベリングが困難になるという可能性が考えられる。

実際、奥村 (2008) によれば、情動への否定的評価は、アレキシサイミアの下位要素である情動認識困難と言語化困難と正の関連を持つことが示されている。よって、情動への評価が個々の情動経験に背後から影響を及ぼすということを想定し検討していくことは有用であろう。情動の意識化やラベリングは、情動が適応的に機能するための重要なポイントであると考えられることから、情動への評価と情動の適応機能との関連を考える観点としても重要と思われる。ただし、奥村 (2008) の報告は、1回の質問紙調査に基づくものであり、因果関係の検討までは行われていない。また、情動の意識化との関連についてはこれまで全く検討されていないことから、今後の検討課題であると考えられる。

IV. 情動への評価の形成

1. 情動同士の相互作用, 派生的感情

では次に、情動への評価はどのようにして形成されるのだろうか。この点について考えるために、まず、Izard (1991) が述べている情動同士の相互作用についての指摘と、これに類似する派生的感情 (工藤・マツモト, 1996) の概念について述べたい。

Izard (1991) は、個別情動について論じる中で、情動同士の相互作用について述べている。例えば、悲しみと恥との相互作用として次のような例を挙げている。「もし子どもの泣きが部分的に親の拒絶や無関心を導いたりするならば、その子どもは非難を感じて羞恥心を示すようになる。このパターンが発達の過程で一貫して繰り返されると、子どもの悲しみは最終的に羞恥心の誘発因に進展するだろう」。また、子どもの悲しみに対する親の非共感的な対応によって、「子どもは、悲しみを示すのは悪いことだと感じるようになってしまう。もしその子どもが泣いたり悲しみを覚えることが悪い行為の一種であると感じるようになれば、悲しみの感情は罪感情を引き起こしうる」と述べている。この指摘は、子どもの情動 (悲しみ) に対する親の反応によって、子どもに異なる情動 (恥, 罪悪感) が引き起こされ、それが発達過程で繰り返されることによって、子どもの情動 (悲しみ) に対する情動 (恥, 罪悪感) がパターン化されることを示唆する (Fig.2)。

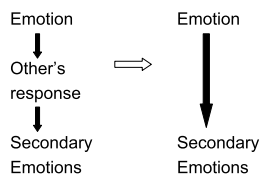


Fig.2 他者からの反応が派生的情動を生じさせる過程 (Izard, 1991を参考に作成)

Izard (1991) は、他の情動同士の相互作用についても述べており、悲しみと怒り、悲しみと恐れ、恐れと恥、恥と抑うつなど、さまざまな情動同士の連合が発達しうることを述べている。一つの情動は、他の情動を活性化させる原因になったり、他の情動によって活性化されたりする。

このような情動同士の相互作用について、Izard (1991) は特に概念化を行っていないが、一つの情動から派生して別の情動が経験されるという意味で、次に述べる派生的感情 (工藤・マツモト, 1996) とも内容的に近い。

派生的感情 (Secondary Emotion²⁾) は、文化的な観点

から情動研究を行っている工藤・マツモト (1996) によって提唱された概念である。工藤・マツモト (1996) は、感情抑制を重んじる日本人特有の感情形態があると指摘し、「基本的感情 感情を引き起こす刺激に対して人が最初に抱く感情 (工藤・マツモト, 1996) に関連して人が感じ取る感情」が存在すると考えた。例えば、怒りを感じていながらそれを表せないとなると、元々の怒りとは別に、自己嫌悪などの異なる情動が生じることが考えられるという。工藤・下村 (1998) によると、初めの情動反応を抑制した場合、被験者の 36.9% が派生的感情を経験したことがあると答え、自分の無力さに起因する自己嫌悪感などの自己に対する否定的感情が多く挙げられたという。また、櫻村・小川 (2007) の調査では、72.1% の人が派生的感情を経験したと答え、その内容は悲しみ・落ち込み (20.2%) が最も多く、他に怒り (18.7%), 諦め・呆れ・無力感 (17.1%), 自己嫌悪・公開・罪悪感 (16.3%), 不安・恐怖・焦り (8.3%) などが認められたという。

この派生的感情の概念は、人々の日常生活におけるより複雑な情動経験を理解していく上で非常に興味深いものである。しかし、具体的な検討は少なく、測定しうる尺度もいまだ開発されていない。また、工藤・マツモト (1996) が、日本人が感情抑制を重んじるという観点を基に派生的感情を提唱した流れから、派生的感情は、元の情動の表出を「抑制」することによって生じることが前提となっている。しかしながら、情動を「表出」することによっても、別の情動が派生的に生じることが考えられる。例えば、人前で怒りをあらわにしまい、恥ずかしく感じたり申し訳なく感じるといったことが考えられよう。よって、情動を抑制した場合に限定せず、「基本的感情を感じたことによって、派生的に経験される感情」と捉えなおすことが有用ではないかと思われる。そして、このように捉えた場合、先に述べた Izard (1991) による情動同士の相互作用に関する記述も、派生的感情として捉えることが可能と思われる。

2. 発達過程における他者との関係性と情動への評価の形成

次に、派生的感情と情動への評価との関係について論じる。Izard (1991) の記述は、子どもの情動に対する親の反応によって、子どもに異なる情動が引き起こされ、それが発達過程で繰り返されることによって、子どもの

²⁾ 情動研究において secondary emotion (二次的情動) という用語は、自己意識を必要とする self-conscious emotion (自己意識的情動) (Lewis, 1992 高橋監訳 1997) の意味で用いられることも多いが、ここで述べている secondary emotion (派生的感情) とは異なるものである。

中に情動に対する情動がパターン化されることを示唆する。また、メタ情動の研究者である Gottman & DeClaire (2001 伊藤訳 2004) も、子どもの時に、親が自分の情動に対してどう反応したかや、情動に対する両親の考え方が、現在に大きな影響を及ぼすと述べている。これに基づいて考えるならば、個人が自分の情動をどのように主観的に捉えるかは、発達過程において、養育者から、自分の情動に対してどのような反応を得てきたかが重要な意味を持つことが推測される (Fig.3)。

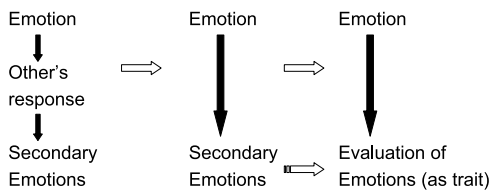


Fig.3 他者からの反応が派生的情動を生じさせ、それが情動への評価に移行する過程

これに関連して、情動に関する個人差は、個人が養育者との間で経験した愛着関係 (Bowlby, 1969) に内在する情動経験の質と密接な関連を持っていることが指摘されている。例えば、Bretherton (1990) は、安定した愛着関係では、互いが互いの情動シグナルを認識し、意味のあるフィードバックを受け取っているのに対し、不安定な愛着関係では、選択的にある種の情動シグナルが無視されるなど偏った情動コミュニケーションが行われているという。さらに、愛着関係でそのような偏ったコミュニケーションがなされると、個人内でも情動情報の流れが阻害されることになるという。また、Sroufe (1996) は、養育者と安定した愛着を築いている子どもは、情動を自由に表出すること、情動の喚起は破壊的なものではないこと、他者の助けを借りてすぐに情動の均衡が取り戻しうることを学んでいるとしている。

このような愛着と情動との関連については実証的にも支持する結果が得られており (Shaver & Mikulincer, 2002; 坂上・菅沼, 2001), 安定した愛着は円滑かつ歪みの少ない (自他の) 情動情報の読み取りと関係していることや、回避的な愛着は苦痛な情緒や記憶、情動情報の読み取りの抑制と関係しており (不活性化), 両価的な愛着は、情動統制の困難や情動情報の過剰な読み取りと関係している (過活性化) ことなどが指摘されている。

これらの議論に基づき、奥村 (2007) は、情動への評価と愛着スタイルとの関連を検討している。その結果、他者懸念および負担感が、両価性の愛着スタイル傾向と正の関連を持つこと、悲しみの他者懸念は、回避性の愛着スタイル傾向と正の関連を持つことなどが報告されており、情動への評価が他者との関係性と関連するもので

あることが示唆されている。しかし、幼少期の愛着や被養育経験との関連を見たものではなく、あくまで現在の対人様式としての愛着スタイルとの関連を検討するとどまっており、因果関係や発達のプロセスを検討したものではない。よって、課題として、発達過程における他者との関係の中で情動への評価が形成されるという仮説について、子どもを含めた調査等を行う必要があると考えられる。

V. 結論と今後の展望

以上、情動への評価に関する研究を概観した。その結果、概念を整理する観点として、(1). 情動への評価は、情動への覚知や認識などと区別され、価値づけを伴うものであること、(2). 自己の情動に対するものか、他者の情動や情動一般に対するものか区別する必要があること、(3). 肯定的評価から否定的評価まで幅のあるものと考えられることなどが提示された。これに基づき、「自己が経験した情動に対する肯定・否定の価値づけを伴う評価 (奥村, 2008)」という定義の有用性を述べた。

次に、Kennedy-Moore & Watson (1999) らのモデルを援用し、情動への評価がどのように情動経験の中に位置づけられるのか、また、関与するのかを論じた。そして、一回性の情動経験における情動への評価の位置づけに加えて、個人が特性的に持っている固定化した情動への評価が、一つの情動経験全体に背後から影響を及ぼすというモデルを提案した。

さらに、Izard (1991) による情動同士の相互作用や、派生的感情 (工藤・マツモト, 1996) を参考に、情動への評価の形成について論じた。子どもの情動に対する親の反応によって、子どもに派生的に異なる情動が引き起こされ、それが発達過程で繰り返されることによって、子どもの中に、情動に対する情動がパターン化され、これが情動への評価に移行するというモデルを提案した。

今後の課題として、今回提案したモデルの実証的検討が望まれる。部分的には、奥村 (2007, 2008) によって検証されているものもあるが、全体的観点からの検討や、因果関係の検討は全く行われていない。これらのことを行うためには、情動への評価を測定した上での実験実施や、子どもを対象とした発達の検討などが必要であろう。

また、情動への評価は、情動の適応機能と関連し、精神的健康や心理的適応と関連することが想定されている。しかし、そのような指標との関連は直接的には全く検討されていない。よって、それらとの関連を検討することや、臨床事例に基づく検討などが望まれる。

謝 辞

本論文作成にあたりご指導いただきました、九州大学

の北山修先生、針塚進先生、吉良安之先生に心より御礼申し上げます。

引用文献

- Bowlby, J. (1969): *Attachment and Loss, Vol1: Attachment*. London: Hogarth Press.
- Bretherton, I. (1990): Open communication and internal working models: Their role in the development of attachment relationships. In R.A.Thompson (Ed.) , *Socio-emotional development (Nebraska Symposium on Motivation 1988, vol1. 36.)* Lincoln: University of Nebraska Press, pp57-113.
- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C. (1989): Emergent themes in the study of emotional development of emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25, 394-402.
- Ciarrochi, J., Forgas, J. P., & Mayer, J. D. (2001): *Emotional intelligence in everyday life: A scientific inquiry*. Philadelphia: Psychology Press. (チャロキー, J.・フォーガス, J. P.・メイヤー, J. D. (編) 中里浩明・島井哲志・大竹恵子・池見陽 (訳) (2005). エモーショナル・インテリジェンス 日常生活における情動知能の科学的研究 ナカニシヤ出版)
- Damasio, A. R. (1994): *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: GP Putnam's Sons.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975): *Unmasking the face*. New Jersey: Prentice-Hall. (エクマン, P.・フリーゼン, W. V. 工藤力 (訳) (1987) 表情分析入門 表情に隠された意味を探る 誠信書房)
- 遠藤利彦 (1996) : 喜怒哀楽の起源 : 情動の進化論・文化論 岩波書店
- 福森崇貴・小川俊樹 (2005) : 不快情動回避心性尺度の作成 筑波大学心理学研究, 29, 125-130
- Goldstein, A., & Chambless, D. (1978): A reanalysis of agoraphobia. *Behavior Therapy*, 9, 47-59.
- Gottman, J. M., Katz, L. F., & Hooven, C. (1997): *Meta-emotion: How families communicate emotionally*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gottman, J. M., & J. DeClaire (2001): The relationship cure. Brockman, Inc., U.S.A. (ゴットマン, J.M., デクレア, J. 伊藤和子訳 (2004). 「感情シグナル」がわかる心理学 ダイアモンド社)
- Gross, J. J., & John, O. P. (2003): Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationship, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.
- 今田純男 (1999): 感情 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田祐司 (編) 心理学辞典 有斐閣 141-142.
- Izard, C. E. (1991): *The psychology of emotions*. New York: Plenum Press. (イザード, C.E. 荘巖舜哉 (監訳) (1996). 感情心理学 ナカニシヤ出版)
- 金築 優・増田智美・及川昌典・根建金男 (2006): 感情への恐れを測定する尺度の作成 日本心理学会第70回大会発表論文集, 421
- 金築 優・増田智美・及川昌典 (2007): 感情への恐れ, 対処法略及びストレス反応の関連性 日本心理学会第71回大会発表論文集, 309
- 櫻村正美・小川俊樹 (2007): 不快感情の抑制に伴って生ずる派生的感情について: 予備的研究 筑波大学心理学研究, 33, 89-94.
- 櫻村正美・岩満優美 (2007): 感情抑制傾向尺度の作成の試み 尺度の開発と信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究, 20, 30-41.
- 河合優年 (2007): 感情の起源 高橋恵子・河合優年・仲真紀子 (編著) 感情の心理学 放送大学教育振興会 pp.22-31.
- Kennedy-Moore, E., & Watson, J. C. (1999): *Expressing Emotion: Myths, Realities and therapeutic strategies*. New York: Guilford Press.
- 木村 晴 (2006): 感情の制御 北村英哉・木村 晴 (編) 感情研究の新展開 ナカニシヤ出版 pp.193-210.
- 小牧 元・久保千春 (1997): 心身症とアレキシサイミア 神経研究の進歩, 41, 681-689. (Komaki, G., & Kubo, C., (1997) . Psychosomatic disease and alexithymia. *Advances in Neurological Sciences*, 41, 681-689.)
- 古宮 昇 (2000): 日本語版感情受容度尺度作成の可能性 大阪経大論集, 51, 173-183.
- 工藤 力・ディビット・マツモト (1996): 日本人の感情世界 ミステリアスな文化の謎を解く 誠信書房
- 工藤 力・下村陽一 (1998): 派生的感情の研究 () Pilot Study 大阪教育大学紀要 部門, 47, 177-190
- Lewis, M. (1992): *Shame: The exposed self*. New York: Free Press. (ルイス, M. 高橋恵子 (監訳) (1997) . 恥の心理学 傷つく自己 ミネルヴァ書房)
- Malatesta, C. Z., & Wilson, A. (1988): Emotion cognition interaction in personality development: A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27, 91-112.
- Mauss, I. B., Evers, C., Wilhelm, F. H., & Gross, J. J. (2006): How to bite your tongue without blowing your top: Implicit evaluation of emotion regulation predicts affective responding to anger provocation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 589-602.
- Mayer, J. D., & Gaschke, Y. N. (1988): The experience and

- meta-experience of mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 102-111.
- Mennin, D. S., Heimberg, R. G., Turk, C. L., & Fresco, D. M. (2005): Preliminary evidence for an emotion dysregulation model of generalized anxiety disorder. *Behavior Research and Therapy*, **43**, 1281-1310.
- 向山泰代 (1998): 気分への注目・気分の明瞭さ・気分の転換 日本語版特性メタ・ムード尺度の検討 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 1003.
- 中田 (北出) 薫 (2006): イラショナル・ビリーフと感情の体験様式との関連: 感情体験尺度作成の試みを通して パーソナリティ研究, **14**, 241-253.
- 奥村弥生 (2007): メタ情動と愛着 愛着スタイルが情動への評価の個人差に与える影響の検討 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 930
- 奥村弥生 (2008): 情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連 教育心理学研究, **56**, 403-413.
- 奥村弥生 (2009): 情動制御と情動への評価との関連～表出抑制と統制可能感の 2 つの観点からの検討～日本心理学会第 73 回大会発表論文集
- Pennebaker, J. W. (1997): *Opening up*. New York: Guilford Press. (余語真夫 (監訳) (2000) オープニングアップ 北大路書房)
- Saarni, C. (1999): *The Development of Emotional Competence*. New York: The Guilford Press. (佐藤香監訳 (2005) . 感情コンピテンスの発達 ナカニシヤ出版)
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001): 愛着と情動制御 対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連 教育心理学研究, **49**, 156-166.
- Salovey, P., Mayer, J. D., Goldman, S. L., Turvey, C., & Palfai, T. P. (1995): Emotional attention, clarity, and repair: Exploring emotional intelligence using the Trait Meta-Mood Scale. In J. W. Pennebaker (Ed.) , *Emotion, disclosure, and health* Washington, DC: American Psychological Association. pp.125-154.
- Shaver, P. R. & Mikulincer, M. (2002). : Attachment-related psychodynamics. *Attachment & Human Development*, **4**, 133-161.
- Sroufe, L.A. (1996): *Emotional development: The organization of emotional life in the early years*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 鈴木有美・木野和代・速水敏彦・中谷素之 (1999): 自己と他者に関するメタ・ムード 不快感情の調整過程に焦点を当てて 名古屋大学教育学部紀要, **46**, 119-129.
- Taylor, G. J., Bagby, R. M., & Parker, J. D. A. (1997): *Disorders of affect regulation: Alexithymia in medical and psychiatric illness*. New York: Cambridge University Press. (テイラー, G. J.・バグビー, R. M.・パーカー, J. D. A. 福西勇夫 (監訳) (1998): アレキシサイミア 感情制御の障害と精神・身体疾患 星和書店)
- Williams, K. E., Chambless, D. L., & Ahrens, A (1997): Are emotions frightening? An extension of the fear of fear construct. *Behavior Research and Therapy*, **35**, 239-248.